

バースカラの無明論批判と別異非別異論

加藤 隆宏

1 はじめに

インド哲学における〈存在〉を考えると、おそらく最初に思い浮かぶのが、ヴェイシェシカ派の 16 パダルタ、サーンキヤ派の 25 原理といった範疇論であろう。彼らによれば、この世のありとあらゆる物や事柄はカテゴリに分類されるが、この範疇化の議論を通じて彼らにとっての〈存在〉が浮き彫りにされている。ヴァイシェシカ派やサーンキヤ派が範疇化を通じて多元論的、二元論的世界観を論じる一方、一元論で知られるヴェーダーンタ派は〈存在〉をどのように捉えたのか。

ヴェーダーンタ派と一口に言ってもそこには数々の学統が存在する。シャンカラ、ラーマーヌジャ、マドヴァなどは最も有名な例で、それぞれの学統は互いに共通する部分を持ちながら、思想的立場の違いを主張し合って今日に至っている¹。彼らヴェーダーンティンの存在論を考える時、まず初めに検討すべきは彼らが共通して依って立つところの『ブラフマ・スートラ』が繰り返し典拠として引用する『ウパニシャッド』、中でも特に「サッド・ヴィドヤー」と呼ばれる ChU 第六篇第二章の有名な一節であろう。

「愛見よ、太初においてこ(=世界)は有のみなりき、唯一にして第二のものなかりき。
[中略] そ(=有)は思えり、われ多とならん、繁殖せんと。そは火(=熱)を創出せ

* 本研究は科研費 23242004、基盤研究 (A) 「インド哲学諸派における〈存在〉をめぐる議論の解明」(代表者：丸井浩教授)の研究成果の一部であり、同科研費により平成 23 年 8 月 24・25 日に信州大学において開催されたセミナーにおいて発表した原稿に加筆修正を加えたものである。発表時にはセミナー参加者より多数のご批判、コメントをいただいた。ここに記してお礼申し上げる。

¹ ヴェーダーンタ派とは何かという問いに対し、しばしば持ち出されるのが“prasthānatraya”と呼ばれる聖典群、すなわち、『ウパニシャッド』、『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』の三文献を根本聖典とみなし、これら根本聖典に説かれる教えを権威とするという点であるが、これはむしろ後代になって後付けされた最大公約数的な基準であると思われる。例えば、S. RADHAKRISHNAN は “In India the threefold canon of religion, *prasthānatraya*, consists of the *Upaniṣads*, the *Bhagavadgītā* and the *Brahmasūtra*.” (S. RADHAKRISHNAN 1960: 10.) などと述べている。また、E.P. RADHAKRISHNAN によれば、prasthānatraya とは、シャンカラの著作に対して複註をなしたスレーシュヴァラ、パドマパーダ、ヴァーチャスパティを筆頭とする三つの伝統的立場であるという。(E.P. RADHAKRISHNAN 1942: 57.) このように prasthānatraya という概念に諸説があるが、管見の限り、prasthānatraya という術語、あるいは三つの根本聖典という概念がシャンカラ、バースカラ、ラーマーヌジャなどのテクストに用いられた事実はない。

もともとは、ヴェーダーンタという言葉が指し示す『ウパニシャッド』文献群に説かれる形而上学的議論をシステムティックに扱った『ブラフマ・スートラ』の伝統に則り、『ウパニシャッド』の解釈学を教学の基礎とする人々をヴェーダーンティン(ヴェーダーンタ派に属する人)と呼んだと考えられるが、その反例として、バルトリハリなど『ウパニシャッド』の解釈によらずヴェーダーンタ的な思想を説いた思想家の例は枚挙にいとまがなく (cf. BRONKHORST 2007: 25-33.)、標準的ヴェーダーンタの基準をにわかに定めることは難しい。ここではとりあえず、後ミーマーンサー学者 (uttaramīmāṃsaka), 即ち、『ウパニシャッド』の解釈を通じてブラフマンの考究を行う思想家を狭義のヴェーダーンティンと仮に定め、その代表格であるシャンカラやバースカラなどについて論じる。

り²。」(辻直四郎『ウパニシャッド』, p. 183.)

ヴェーダーンティンたちは、この一節に説かれる第二のものを持たない有 (*sat*) がブラフマンであるという解釈を共有し³、この一節を根拠にして、有=ブラフマン=世界原因という一元的存在論を展開している。しかしながら、このような一元論には必然的にある難問が付随する。それはすなわち、こうして現に我々の目の前にある雑多な個人存在 (我) がいかにして第二のものを持たない有 (梵) から生じ得るのかという存在論上の問いであり、また、一見すると明らかに断絶した梵と我との関係性が一如であるという真理をいかにして体得することができるのかという解脱論上の問いである。これらの問いに満足な解答を与えられなければ、一元というヴェーダーンタ教説の屋台骨が揺らぐことになってしまう。

この難問に「無明」(*avidyā*) という概念によって解答を与えたのが、ヴェーダーンタ派の中でも最も有名なシャンカラである。シャンカラは無明という概念を足がかりに、仮現 (*vivarta*)、未展開の名称と形態 (*avyākṛte nāmarūpe*)、付託 (*adhyāsa*) などという理論によって、唯一無二のブラフマンとそれ以外の多様性の両立について理由づけを行った。しばしば“幻影主義的 (*illusionistisch*)⁴”と形容されるシャンカラの存在論によれば、ブラフマンという原因から生じた結果である多様な世界は無明によって現し出された幻に過ぎず、無明の消滅とともに雲散霧消するものであるとされる。この理論によれば、雑多な現象世界はすべて存在しているように見えて実のところ実体のないものということになり、真に実在するものは“第二のものを持たない有”たるブラフマンのみであるという一元論の核心を理屈の上では説明できるかもしれない。しかしながら、この解答では先の問いを本質的に解決したことにはならない。というのも、この答えは、世界を多様に現し出す無明とは一体何かという別の問いを生み出すからだ。この新たな問いに対し、シャンカラは特に積極的な説明を行わず、“真実であるともそれ以外 (=非真実) であるとも言説不可能な未展開の名称と形態⁵”から世界が展開したと表現するに留め、この問題に正面から取り組むことを避けたようである⁶。また、瞑想の境地として無明を取り払って梵我一如を体得することが仮にできたとしても、瞑想を離れた実生活は再び無明の支配下で営まれるという経験上の齟齬などが、シャンカラの理論によって解消できているとは言い難い。

思想史上、シャンカラのこのような幻影主義的一元論は、それまでのヴェーダーンタの主流であった伝統的な実在論的一元論にとって代わったと言われる⁷。新しい考え方に対しては、もちろん伝統的な立場からの反発があった。例えば、シャンカラの同世代か、あるいは少し後に出たとされるバースカラはその主著『ブラフマ・ストラ註解』の中で、“ストラの真意を隠して己の意見を顕示する⁸” 註釈者 (=シャンカラ) の教説を「幻影論

² *sad eva somyedam agra āsīd ekam evādvitīyam [...] tad aikṣata bahu syāṃ prajāyeyeti. tad tejo'srjita* (LV: 137.)

³ e.g. BŚŚbh *ad* I.1.4, II.3.1; BSBhbh *ad* I.1.1, I.1.4; Śrībh *ad* I.1.4, I.1.5.

⁴ HACKER 1953: 192, fn. 1.

⁵ BŚŚbh *ad* I.1.5: *tattvānyatvābhyām anirvacanīye nāmarūpe avyākṛte* (BŚŚbh: 27.)

⁶ 前田 1980: 135, 注記 (1).

⁷ 前田 1980: 91–2.

⁸ *sūtrābhiprāyasamṣṛtyā svābhiprāyaprakāśanāt / vyākhyātām tair idam śāstram vyākhyeyaṃ tannivṛttaye // BSBhbh 冒頭偈.*

者」の言としてたびたび批判し⁹、自己の教説こそが伝統的立場であると主張している¹⁰。

本稿では、この点を踏まえ、これまで研究が乏しかったバースカラに焦点を当て、彼の名著『ブラフマ・スートラ註解』にみられるシャンカラの無明論批判とバースカラの言う伝統的立場「別異非別異論」について検討し、ヴェーダーンタ派における存在論について考察したい。

2 バースカラ著『ブラフマ・スートラ註解』

本題に入る前に、簡単にバースカラと彼の名著『ブラフマ・スートラ註解』についての先行研究をまとめておきたい。

『ブラフマ・スートラ』に対する註解と言えば、シャンカラやラーマヌジャのそれが代表的なものとされ、彼らの解釈に従った『ブラフマ・スートラ』研究が数多く成されてきた。特に現存する註釈文献の中で最も古いシャンカラ註は、『スートラ』の原意に最も忠実であると強く信じられており、これまでの『ブラフマ・スートラ』研究はシャンカラ(時には、シャンカラの註釈に対するヴァーチャスパティミシュラの複註釈『バーマティー』など)の聖典観の再現によって置き換えられてきた感が強い。しかしながら、『ブラフマ・スートラ』の原意に最も忠実であるのはバースカラによる註解であるということは、中村元博士を始め研究者がたびたび指摘してきたところである¹¹。それにも関わらず、『バースカラ註解』については今日に至るまでほとんど研究がされてこなかった¹²。この主な原因としては、1915年に出版された初版本の不備が挙げられ、この点はこれまで多くの研究者によって指摘されてきた¹³。この問題点を解消すべく、シカゴ大学の故ファン・バイトネン教授が校訂テキスト作りに乗り出したのは、今からおよそ40年前のことである。彼の60年代の論文には、校訂テキストとその英語訳を近く出版公開するという旨が発表されているが、これらの資料は様々な理由により出版公開には至らず、教授の死後、資料

⁹ 中村 1950: 89; 1951: 386.

¹⁰ HACKER 1953: 210.

¹¹ Cf. e.g. 中村 1951: 387.

¹² バースカラを中心に扱った先行研究は以下の通り。M.L. Sircar, “The Philosophy of Bhāskara,” *Philosophical Quarterly* 3, 107–40, Amarnet, 1927; 金倉 1928; B.N.K. Sarma, “Bhāskara — a forgotten Commentator on the Gītā” *Indian Historical Quarterly* 9, 663–77, 1933; SRINIVASACHARI 1934; Mysore Hiriyanna, “Bhāskara’s View of Error,” *Journal of the Ganganatha Jha Research Institute* 1, 48–56, Allahabad, 1943; J.A.B. van Buitenen, “A Contribution to the Critical Edition of the *Bhagavadgītā*,” *Journal of the American Oriental Society* 85, 99–109, 1965; D.H.H. Ingalls “Bhāskara the Vedāntin,” *Philosophy East and West* 17, 61–7, 1967; Hajime Nakamura, “Bhāskara, the Vedāntin in the Buddhist Literature,” *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute* 48–49, 119–122, 1968; T.K. Gopaldaswamy Aiyengar, “Bhāskara on the Gītā,” *Gītāsamīkṣā*, ed. by E.R. Sreekrishna Sarma, Tirupati, 1971; V. Raghavan, “Bhāskara’s *Gītābhāṣya*,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 12–13, 281–94, 1968; RÜPING 1977; 正信公章, “Vedānta 学者 Bhāskara の研究 (I),” 『印度学仏教学研究』 54, 32–5, 1979; Id., “Bhāskara 作 *Bhagavadgītābhāṣya* における *Bhagavadgītā* 引用句について” 『インド思想史研究』 1, 7–17, Kyoto, 1981; Id., “Kullūka の *Manvarthamuktāvalī* 第 1 章にみる Bhāskara 説受容の事実” *Samhāṣā* 5, 84–9, Nagoya, 1983; Id., “Bhāskara の *Brahmasūtra* 注解にあらわれる「展現解消説」要素” 『インド思想史研究』 4, 1–8, Kyoto, 1985; A.B. Kanna, *Bhāskara-cārya, A study with special reference to his Brahmasūtrabhāṣya*, Amar Granth Publications, Delhi, 1998; KUMUDINI 2001; DEODHAR 2004

¹³ See KATO 2010: 296–7.

も行方不明となってしまった¹⁴。

筆者は、この未出版の遺稿がドイツ・マルティンルター大学インド学研究所W・スラーイエ教授の管理下にあることを知り、スラーイエ教授を通じて、資料の現在の保有者であるファン・バイトネン婦人の許可を得、資料の確認及び内容の精査に着手した。ファン・バイトネン教授の遺稿は、手書きのデーヴァナーガリ文字によるテキスト本文とタイプライターによるイントロダクション及び脚注によって構成され、訂正などがそのまま書き込まれている。これら訂正部分はエディターの最終判断を示すものであると推測されるが、多くの場合文字の掠れなどによって判読が難しい。写真複写版として資料をそのまま複写再生したのでは使用に耐えないため、資料の情報を編集し直したディプロマ版を準備した¹⁵。

ファン・バイトネン教授のエディションは9本の写本を使用し、初版本の不備を大幅に改善するものではあるが、資料自体が未完成であることに加え、校訂方法が現代の研究水準を満たしていないということ、また異読情報の見落としなどの誤りが多くみられることなど理由で、本論文の中心課題である新しい校訂版作成のための資料の一つとして扱うに留めた。

筆者は2007年に出版されたNCC第15巻収録の写本情報などをもとに「バースカラ註解」の写本を求め、新たに11本の写本を確認・発見した。新しい批判版には、そのうち9本(うち4本は一部分のみ)とファン・バイトネン教授が使用した写本のうち最も主要な2本を確認のために参照した。これらの写本から得られた異読情報、ファン・バイトネン教授版に報告された異読情報、さらに、初版本の本文情報および異読情報をもとに、批判的テキスト校訂の観点から現時点でもっともバースカラのオリジナルに近いテキストを準備した。今回の研究では、新しく準備された批判版が底本として用いられることになる¹⁶。

3 バースカラの無明論批判

バースカラは實在論的一元論という伝統的な立場から、シャンカラの主張する“幻影主義的”な世界観を批判した。具体的には、現前の世界が幻影にすぎず、その幻影は無明(avidyā)、シャンカラの別の言葉¹⁷を借りれば“誤った認識”によって引き起こされたものであるという主張に対する反論を行ったのである。

この“誤った認識”について、シャンカラは『ブラフマ・スートラ註解』の中で次のように端的な定義を述べている。

すなわち、一本の柱について、「柱であるか、或いはそれとは別の人間か」と考えるのは正しい認識(tattvajñāna)ではない。この場合、「或いはそれとは別の人間か」というのは誤った認識(mithyājñāna)である¹⁸。

¹⁴ VAN BUITENEN 1961: 190, fn. 1. Cf. KATO 2010: 297–8.

¹⁵ ファン・バイトネン教授の遺稿とその再生方法について、詳しくは拙稿 KATO 2010 を参照されたい。

¹⁶ 本稿でバースカラ註解を参照する場合、未発表の新校訂版に従い、第二篇までは KATO 2011 に収録のページ番号を、第三篇、第四篇については該当するスートラ番号のみを記した。

¹⁷ シャンカラは無明(avidyā)と誤った知(mithyājñāna)を同義語として扱っている。Cf. 前田 1980: 237; 250.

¹⁸ BSSbh ad I.1.2: na hi sthāṇāv ekasmin sthāṇur vā puruṣo 'nyo veti tattvajñānaṃ bhavati / puruṣo 'nyo

実在について、人の判断に依存しないありのままの知 (vastuyāthātmyajñāna) こそが正しいのであって、「或いは」というように人が随意的な判断を行うことは“誤った認識”である¹⁹。この柱の比喩を一元論の文脈に当てはめれば、実在 (vastu) とはブラフマンであり、第二のものを持たないブラフマンに対して「或いは」という選択肢は成り立たない。従って、「或いはブラフマン以外の何か別のもの」などはもともと存在せず、個人存在の判断に基づいてそのようなものを認識することはことごとく誤りであるということになる。

このようなシャンカラの無明論をバースカラは批判する。とりわけ、シャンカラが“真実であるともそれ以外 (=非真実) であるとも言説不可能な”ものとして正面からの解答を避けた無明そのものに疑問を呈する。シャンカラはブラフマンという唯一の世界原因との矛盾を避けるため、無明が世界の質料因となるような何らかの実体であるとは言わず、“心理・知覚上の誤り²⁰”と考える。しかしながら、多様性の認識=無明(誤った認識)=世界の質料というシャンカラの無明論は成立しないのではないかというのがバースカラの批判の趣旨である。バースカラは以下に見るような帰謬論証を示した上で、シャンカラの言うような無明の存在を想定することが不可能であると述べる²¹。

〈無明が存在すると仮定した場合〉

☆無明というのは、別異の認識か、それともその反対のもの (=非別異) の認識か。

★無明は別異の認識であると仮定した場合、

*それは、知とは別のものであるのか、それとも知の非存在か。

×知の非存在ということはない。

×知とは別のものということはない。

★無明は非別異の認識であると仮定した場合、

*それは、常住なものであるか、それとも無常なものであるか。

×常住ではない。

×始まりをもつもの (=無常なもの) ではない。

*それは、ブラフマンに属するのか、それとも個人存在に属するのか。

×ブラフマンに属さない。

×個人存在に属さない。

×主宰神にも属さない

veti mithyājñānam / (BSŚbh: 8.)

“sthānur vā puruṣo 'nyo vā” という一文については「柱であるか、或いはそれとは別の人間か」、もしくは「柱であるか、或いは人間か、或いは何か別のものか」という二通りの解釈が可能で、複註作者の間でも見解の相違がみられる。ここでは最も古いパドマパーダの複註『バンチャパーディカー』とヴァーチャスパティミシュラの複註『バーマティー』に従って前者の解釈を取った。Cf. PP: 308; Bhā: 53.

後者の解釈を採る例としてはアヌブーティスヴァルーパーの複註『ブラカタアルタヴィヴァラナ』が挙げられる。

nanu sthānur vā puruṣo vānyo veti vastuny api vikalpā dr̥śyante (PAV: 46.).

¹⁹ na tu vastv evam naivam asti nāstīti vā vikalpyate / vikalpanās tu puruṣabuddhyapekṣāḥ / na vastuyāthātmyajñānam puruṣabuddhyapekṣam / kiṃ tarhi vastutantram eva tat / (BSŚbh: 8.)

²⁰ 前田 1980: 237.

²¹ BSBhbh: 29–30.

→無明が存在するという仮定のもとでは、すべての可能性が否定される。従って、無明の存在は想定できない。

それでは、このようにシャンカラを批判するバースカラ自身の世界観はどのようなものかと言え、シャンカラの無明論との関連で彼が特に強調するのは以下の二点である。

- ・実在 (=ブラフマン) の結果たる世界は実在である²²。
- ・実在である世界を対象とした別異の認識は知である (=無明ではない)²³。

シャンカラによれば、無明は“心理・知覚上の誤り”である。同じように、バースカラも、無明とは身体などの非アートマンにおいてアートマンを把握すること、また、ブラフマンの本来の姿を把握しないことと定義しており²⁴、無明が認識上の誤りであるという点で両者の見解は一致する。彼らの見解の相違点は、別異 (ブラフマン以外の多様性) の実在性に関する点である。シャンカラは別異の認識 (=無明) は誤りであり、認識された別異は実在しないと考え、バースカラは別異の認識は誤りではなく、従って別異そのものは実在であると考えている。つまり、多様に現れた世界に実在性を認めるか否かが両者の対立点となるわけである。

4 バースカラの別異非別異論

シャンカラによれば、世界は主観の側の状態に応じて異なった在り方で現れるということになる。つまり、ウパニシャッドの明知により梵我一如の境地を達観した人にとって世界は実体のないただの幻であり、未だその境地に至らない人にとっては依然としてそこに在るものとして認識される。世界の実在性を認めるバースカラの立場からすれば、見る人によって見える世界が異なるという事態は容認することができないものであるが、シャンカラは、「非別異は実在、別異は非実在」という論法でブラフマンの一元性を強調したと考えられる。

それでは、バースカラのいう実在論的世界観において、ブラフマンと世界の関係はどのように論じられるのか。この議論は、「一つの事物において、別異 (bheda) と非別異 (abheda) という二つの在り方は両立可能なのか？」という前主張者の問いによって説き起こされる。

この前主張者の問いに対し、バースカラはいくつかの視点から解答を試みる。彼はまず普遍 (sāmānya) と個別 (vyakti) の関係を持ち出し、一切は普遍として非別異であり、個別としては別異であるという理屈をこの場合に適用する²⁵。また、結果である個人存在は原因であるブラフマンより生起し (utpatti) そこにおいて存続し (avasthiti) その中に帰滅する (pralaya) という世界観において、原因 (=非別異) と結果 (=別異) の間に熱さと冷たさの

²² brahmakāryatvāt prapañcasya vastutvam (BSBhbh: 27.)

²³ bhedajñānam api jñānam eva (BSBhbh: 26.)

²⁴ jīvasya vastubhūtasya dehādiṣv anātmasu viparītajñānam brahmasvarūpāpratipattiś ca / tad ubhayam grahaṇāgrahaṇam avidyā / (BSBhbh: 27.)

²⁵ sattājñeyatvadravyatvādisāmānyātmanā sarvam abhinnaṃ / vyaktyātmanā tu parasparavailakṣaṇyād bhinnaṃ (BSBhbh: 23.)

場合のような矛盾はあたらぬという²⁶。

さらに、バースカラは全体と部分という関係によって原因と結果を論じる。

(前主張者) もし最高者そのものがそのままこの個人存在であるとすれば、「この実に偉大にして不生の我は」(BĀU IV.4. 22; 24; 25.) というマイトレーイーに関わる教説は無意味であるということになる。というのも、一切を知る者にとって教授者は無用であるから。

(バースカラ) あなたの主張は正しい。しかしながら、無始より発動する無明と業という限定的添性によって、別異は確かに存在するのだ。すなわち、この個人存在は最高者の部分である。ちょうど、火花が火の部分であり、土製の壺など、すなわち基体という限定的添性によって限定された空洞が虚空の部分であるように²⁷。

『ムンダカ・ウパニシャッド』などでは最高者と個人存在の関係が火と火花に喩えられるが²⁸、バースカラも同じように、非別異と別異を部分と全体の関係と捉え、非別異が限定的添性によって区分されることで別異が認識されると考える。このように個人存在が最高者ブラフマンの部分であるという考え方は『ブラフマ・ストトラ』にもみられる伝統説であるが²⁹、諸註釈家の解釈上の問題として注意すべきは限定的添性 (upādhi) という概念についてである。

シャンカラも彼の世界観において、無明によって仮構された名称・形態という限定的添性の制限により唯一の世界原因が多様な個人存在として現れ出るといふ。一つのことを複数のものとして現し出す限定的添性、あるいはその根本原因である無明の働きに関して言えば、両者の説は共通であると言える。

しかしながら、シャンカラの考える限定的添性はブラフマンという実在を制限し、それによって制限されたブラフマン、すなわち個人存在はもはや実在性を有しないことになる。この限定的添性によってもたらされた別異はすべて無明に基くものであり、睡眠時の夢がそうであるように実在性を持たない。このことは、ちょうど熟睡時に夢を見ない喩えによって示されるように、明知を得たものには知覚されないものである³⁰。

一方、バースカラによれば、限定的添性はブラフマンを区分するが、たとえ区分されても個人存在は実在性を失わず、実在の部分としてあり続ける。従って、明知によって無明が取り除かれても、そこには限定的添性によって区分された身体などの部分が依然として

²⁶ nanu śītoṣṇayor yathā parasparaṃ virodhas tathā bhedābhedayoḥ / kim idam ucyate — nāsti virodha iti / atrocitate — bhavataḥ prajñāparādho 'yam / na vastuvirodhaḥ / katham / saḥānavasthānaṃ chāyātāpavad bhinnadeśavartitvaṃ ca śītoṣṇavad virodho nāma / etad ubhayam iha kāryakāraṇayor brahmaprapaṅcayor nāsti tadutpattes tatraivāvasthites tatraiva ca pralayāt / (BSBhbh: 24.) この一節は、或る者の説としてラーマヌジャによって引用批判される。Cf. Śrībh: 159–61.

²⁷ nanu yadi para eva sāḥśād ayaṃ jīvo nāma syāt tata upadeśo 'narthako maitreyayāḥ "sa vā eṣa mahān aja ātmā" iti / na hi sarvajñasyopadeṣṭrā prayojanam / atrocitate samyag āha bhavān / asti bhedo 'py anādikālapravṛttāvidyākarmopādhyavacchedāt / aṃśo hi parasyāyaṃ jīvo nāma yathāgner visphuliṅgā yathākāśasya pārthivādyadhiṣṭhānopādhyavacchinnaḥ chidrapradeśaḥ / (BSBhbh: 141–2.)

²⁸ Cf. MuU II.1.1.

²⁹ 『ブラフマ・ストトラ』II.3.43 以下、aṃśādhikaraṇa と伝統的に呼ばれる論題において、個人存在 (jīva) はブラフマンの部分であるという説が展開される。

³⁰ Upad I.17.16–20.

残ることになる。これら残された実在は、当然、“第二のものを持たない有”という原則と相容れないものであるが、この点についてバースカラは何も言及しないままである。

5 bhedābheda の意味

バースカラは bhedābheda 論者であると呼ばれるが、bhedābheda という術語にどのような訳語を充てるかについて、従来の研究では見解の一致をみていない。ヴェーダーンタ派の共通見解では“bheda”と“abheda”の両語ともにブラフマンと個人存在の関係を示すものとして理解されている。つまり、個人存在 (jīva) と呼ばれる個々の存在がブラフマンと異なる、あるいは異なる（同一である）という文脈で用いられる例が一般的である。

本邦における先行研究では、例えば、“不一不異”(前田 1980: 17; 中村 1996: 27.)、“差別非差別”(金倉 1928: 153.) などという訳語が充てられ、外国語訳では代表的なものとして“difference and non-difference”(THIBAUT 1904: 345; DASGUPTA 1940: 1.)、“distinction (and) unity”(HIRIYANNA 1934: v.)、“unity and multiplicity”(S. RADHAKRISHNAN 1923: 670.)、“Verschiedenheit und Nichtverschiedenheit”(DEUSSEN 1887: 551; RÜPING 1977: 1.)、“[Lehre des gleichzeitigen] Unterschieds und Nichtunterschieds”(VETTER 1972: 14.) などがある。

バースカラ自身の用例を見ると“jīvaparaśo ca bhedābhedaḥ” (BSBhbh: 42.)、“kāryakāraṇayor bhedābhedaḥ”(BSBhbh: 170.) “parasparabhedābhedaḥ [...] jīvaparaśoḥ” (BSBhbh ad III.2.28.) など個人存在 (=jīva, kārya) とブラフマン (=para, kāraṇa) との関係を bheda もしくは abheda と表現する例が数例見られる。バースカラは別の個所で、bheda と abheda との関係を波や泡などと海との関係に喩えて述べている。この比喩では、波や泡などといった個別の事物 (=個人存在) はそれぞれ互いに異なる (bheda) が、これら個別の事物は海 (=ブラフマン) とは異なる (abheda) という³¹。この場合、“bheda”をブラフマンとの“別異,” “abheda”をブラフマンとの“非別異,” と理解して大過はないだろう。そしてこれらの場合に共通して bheda と abheda は並列複合語で用いられることを考慮に入れれば³²、先行研究に多く見られる“difference and non-difference [of jīva(s) from brahman] (個人存在のブラフマンとの別異と非別異)”という解釈は妥当である³³。

しかしながら、バースカラの用法はそれだけではなく、“bhedābhedarūpaṃ brahmeti”(BSBhbh ad III.2.11.) など、ブラフマンという存在の姿形を bhedābheda という語によって表現する場合も見られる。先に例示した海と波、海と泡の関係を考える場合でも、

³¹ jīvānāṃ parasparaṃ bheda eva paramātmānā cābhedaḥ phenatarāṅgādīnāṃ iva (BSBhbh: 128.) anayor vibhāgaḥ paramātmānā cāvibhāgaḥ / yathā loke samudreṇānanyatve 'pi phenatarāṅgādīnāṃ parasparavibhāgo nābhedāpattir evam atrāpi syāt / (BSBhbh: 154.)

BSBhbh(Dv) は二番目の引用文中“vā vibhāgaḥ”と読み、HACKER はこの読みに従って“Zwischen beiden (dem Subjekt und dem Objekt der Erfahrung — besteht) Verschiedenheit **oder auch Verschiedenheit vom Höchsten Selbst** (主体と客体との間、あるいはまた最高我との間に別異 [が存する], 太字強調は筆者によるもの)”と解するが、これは BSBhbh(Dv) の不備に起因するものである。新しいテキストでは写本情報に基づき、“cāvibhāgaḥ”と読む。この読みは一番目の引用文中の“paramātmānā cāvibhāgaḥ”によっても支持される。Cf. BSBhbh(Dv): 92; HACKER 1953: 211–2.

³² Cf. SHARMA 1962: 317.

³³ 一部の研究には“identity in diversity”(SRINIVASACHARI: 199.)、“non-difference in difference”(SRINIVASACHARI: 295.)、“unity in diversity”(KUMUDINI 2001: 52; DEODHAR 2004: 640.) など、“bheda”と“abhed”の両語に格関係を読み込むものもある。

海が海そのものとしての姿 (abheda) と部分としての波や泡といった多様な姿 (bheda) を同時に持つという意味で bhedābheda という概念を捉えることができる。この場合、bheda という語は S. RADHAKRISHNAN の言うような “multiplicity”³⁴ あるいは KUMUDINI の言うような “diversity”³⁵ を含意し得るものと考えられよう。このことはバースカラによる次の一詩節からも明らかである。

[ブラフマンは] 結果としては多様 (nānātva) であり、原因としては一様 (abheda) である。[金は] 耳飾りなどとしては多様であるが、金としては一様であるように³⁶。

バースカラはブラフマンが原因としては一様であり、結果としては多様であるという世界観を以上のような一詩節にまとめている。この結論部分に忠実になるならば、バースカラの bhedābheda は彼の世界観を表す言葉として解することも可能で、その場合 “unity and diversity [of brahman] (ブラフマンの一様性と多様性)” などと翻訳すべきであろう。

6 まとめ

主観の側にも客観の側にも属さず、それでいて主客の別を生み出すという無明によって現前の世界が仮構されると考えるシャンカラと、目の前の事物に客観的実在性を認めるバースカラのコスモロジーにおける見解の相違は、彼らの思想的立場の違いを最も明確に示すものであり、この点を巡って両者の議論は絶えず平行線を辿ることになる。例えば、解脱論における両者の見解の相違はその好例の一つだろう。バースカラにとって世界は実在に他ならず、祭式行為の執行に必要な場として機能するものである。従って、彼の解脱論はウパニシャッドの知と祭式行為との併合という形を取った。一方、解脱に至るには知のみで足るというシャンカラの念頭には、無明の結果現れた世界は虚妄であるという前提があり、その世界観が、ウパニシャッドに説かれる梵我一如とその想念とによって無明の働きをコントロールすればよしという解脱論に現れている³⁷。

今回の論考では、シャンカラとバースカラの存在観を、特に幻影主義と実在主義の対立に焦点を当てて考察した。ブラフマン一元論という原則のもと、いかにして一から多が生ずるのか、また、いかにして多が一と合一するのかという問いに対し、シャンカラは非実在というカテゴリを設定することで一元 (advaita) という原則に忠実であろうとしたことがうかがえる。しかしながら、非実在というカテゴリを設けること自体が二元論の誤謬に陥るという点については彼自身、明確な解答を与えていない。一方、バースカラはブラフマンという一つの原理において別異と非別異が両立可能であると考えながら、別異が実在であるとした時点で、理論上、一元という原則から既に逸脱してしまっていると言えよう。にもかかわらずバースカラが全体と部分などという論理で一と多の両立を説明しようとし

³⁴ S. RADHAKRISHNAN 1923: 670; Cf. also HIRIYANNA 1943: 40.

³⁵ KUMUDINI 2001: 52.

³⁶ kāryarūpeṇa nānātvam abhedam kāraṇātmanā / hemātmanā yathābhedam kuṇḍalādyātmanā bhidā // (BSBhbh: 28.)

この詩節はヴァーチャスパティの『パーマティー』に引用、批判される。(Bhā: 72-3.)

³⁷ 両者の解脱論における対立は、単に伝統と革新というイデオロギー上の相違に根差すものではなく、彼らが所属する社会の相違、出家か在家かといったライフモードの相違にも大きく関わるものである。この点については KATO 2009 で詳しく論じた。

たのは、新規概念を次々と持ち出したシャンカラに対して、ウパニシャッドに説かれる世界観の枠組みのなかで説かれる伝統的な実在論的一元論を改めて強調しようという試みだったとも考えられる。

バースカラの別異非別異論はシャンカラ派のヴェーチャスパティによってたびたび引用されて批判されている³⁸。また後に、ラーマヌジャ派、マドヴァ派からも批判を受けた³⁹。これらについては未だ全容が明らかになっていないが、ヴェーダーンタ派の存在論を解明する上での重要なトピックになると思われる。バースカラに対する批判の詳細解明については今後の課題としたい。

〈略号および使用テキスト〉

- Bhā *Bhāmatī*, in *Brahmasūtra-Śaṅkarabhāṣya with the Commentaries: Bhāṣya-ratnaprabhā* of Govindānanda, *Bhāmatī* of Vācaspatimiśra, *Nyāyanirṇaya* of Ānandagiri, ed. by J. L. Shastri, Motilal Banarsidass, Delhi, 1980. (Revised and reprinted from the edition of M.S. Bakre, Nirṇayasāgar Press, Bombay, 1934.)
- BSBbh *Śārīrakamīmāṃsābhāṣya*, see Kato 2011.
- BSBbh(Dv) *Brahmasūtra with a commentary by Bhāskarācārya*, ed. by V.P. Dvivedin, Chowkhamba Sanskrit Series 20, Varanasi, 11915 (21991).
- BSŚbh *Brahmasūtrabhāṣya of Śaṅkara*, Text with Tippanis, revised by Wāsudeo Laxman Shāstrī Paṅsīkar, Nirṇayasāgar Press, Bombay, 1915.
- ChU *Chāndogya-Upaniṣad*.
- LV *Eighteen Principal Upaniṣads*, vol. I, ed. by V.P. Limaye and R.D. Vadekar, Poona, 1958.
- NCC *New Catalogus Catalogorum: an alphabetical register of Sanskrit and allied works and authors*, vol.15, ed. by Siniruddha Dash, University of Madras, 2007.
- PAV *Prakāṭarthavivarāṇa*, 2 vols, ed. by T.R. Chintamani, Madras, 1939.
- PP *Pancapādikā*, ed. by S. Śrīrāma Śāstri and S.R. Krishnamurthi Śāstri, Government Oriental Manuscripts Library, Madras, 1958.
- Śrībh *Śrībhāṣya* of Rāmānuja, Part I, edited with notes in Sanskrit by Vasudev Shastri Abhyankar, Bombay, 1914.

(参考文献)

- 金倉圓照 [1928] 「吠檀多の一異流、特にバースカラに就て」、『思想』79, pp. 153–88, 岩波書店, 東京。(『インド哲学と教学研究』に再録)
- 辻直四郎 [1990] 『ウパニシャッド』, 講談社学術文庫, 講談社, 東京。
- 中村元 [1950] 『初期のヴェーダーンタ哲学』, インド哲学思想第一巻, 岩波書店, 東京。

³⁸ 注 36 を参照。

³⁹ 注 26 を参照。

- [1951] 『ブラフマ・ストラの哲学』, インド哲學思想第二卷, 岩波書店, 東京.
- [1996] 『ヴェーダーンタ思想の展開』, 中村元選集 [決定版] 第 27 卷, 春秋社.
- 前田專學 [1980] 『ヴェーダーンタの哲学』, 平樂寺書店, 京都.
- BRONKHORST, Johannes
- [2007] “Vedānta as Mīmāṃsā,” *Mīmāṃsā and Vedānta*, Papers of the 12th World Sanskrit Conference, Vol. 10.3, ed. by Johannes Bronkhorst, pp. 1–91, Motilal Banarsidass, Delhi.
- DASGUPTA, S.
- [1940] *A History of Indian Philosophy* vol. III, Cambridge. (Reprint, Motilal Banarsidass, Delhi, 1991.)
- DEODHAR, Lalita
- [2004] “Bhāskara’s refutation of Jīvanmukti,” *Three Mountains and Seven Rivers*, pp. 639–44, ed. by S. Hino and T. Wada, Delhi.
- DEUSSEN, Paul
- [1887] *Die Sūtra’s des Vedānta*, Brockhaus, Leipzig.
- HACKER, Paul
- [1953] *Vivarta: Studien zur Geschichte der illusionistischen Kosmologie und Erkenntnistheorie der Inder*, Verlag der Akademie der Wissenschaften und der Literatur in Mainz, Wiesbaden.
- HIRIYANNA, Mysore
- [1934] “Philisophy of Bhedābheda,” A Foreword to SRINIVASACHARI 1934, p. v–viii.
- KATO, Takahiro
- [2009] “Ritual, Knowledge and Liberation in Vedānta,” *Hōrin* 15, pp. 55–70. Eko Haus der Japanischen Kultur, e.V., Düsseldorf.
- [2010] “Bhāskara’s Brahmasūtrabhāṣya: An Unpublished Edition by J.A.B. van Buitenen,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Sudasiens* LII/LIII, pp. 295–305.
- [2011] *The First Two Chapter of Bhāskara’s Śārīrakamīmāṃsābhāṣya*: critically edited with Introduction, Notes and an Appendix, Dissertation vorgelegt der Martin-Luther-Universität, Halle-Wittenberg. (Unpublished)
- KUMUDINI [2001] *Doctrines of Śāṅkarabhāṣya and Bhāskarabhāṣya on Brahmasūtras*, Vidyanidhi Prakashan, Delhi.
- VAN BUITENEN, J.A.B.
- [1961] “The Relative Dates of Śāṅkara and Bhāskara,” *Adyar Library Bulletin* 25, pp. 268–73.
- RADHAKRISHNAN, E.P.
- [1942] “The Pañcapādikā Literature,” *The Poona Orientalist* 6, pp. 57–73.

RADHAKRISHNAN, S.

[1923] *Indian Philosophy* vol. II, George Allen & Unwin, London. (Reprint, Oxford Univ. Press, 1999)

[1960] *The Brahma Sūtra*, The philosophy of spiritual life, George Allen & Unwin, London. (Reprint, Greenwood Press, New York, 1968)

RÜPING, Klaus

[1977] *Studien zur Frühgeschichte der Vedānta-Philosophie*, Teil I Philologische Untersuchungen zu den Brahmasūtra-Kommentaren des Śāṅkara und des Bhāskara, Franz Steiner Verlag, Wiesbaden.

SHARMA, B.N.K.

[1962] *Philosophy of Śrī Madhvācārya*, Bharatiya Vidya Bhavan, Bombay. (Reprint, Motilal Banarsidass, Delhi, 1991.)

SRINIVASACHARI, P.N.

[1934] *The Philosophy of Bhedābheda*, The Adyar Library and Research Center, Madras.

THIBAUT, George

[1904] *Vedānta-Sūtras with the Commentary by Śāṅkarācārya*, Part I, Sacred Books of the East, Vol.34, Oxford Univ. Press, London. (Reprint, Motilal Banarsidass, Delhi, 1992.)

VETTER, Tilmann

[1972] *Sarvajñātman's Saṅkṣepaśārīrakam*, 1. Kapitel, Der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien.

2011.10.14 稿

かとう たかひろ ハレ大学研究員

Bhāskara's Concept of *bhedābheda* and His Critique of *avidyā*

Takahiro KATO

When we think about the ontology of the Vedānta, the most popular argument may be Śāṅkara's monistic interpretation of the *Upaniṣads*. He interprets “*sat*” of the passage “*sad eva somyedam evāgra āsīt*” (ChU VI.2.1.) as the absolute being and emphasizes the point that there exists only one being (*brahman*) with the empirical existence (*jīva*) being merely an illusion caused by nescience (*avidyā*). His monistic theory of beings, usually regarded as “illusionistic cosmology,” however, deviates from the traditional viewpoint of the Vedānta which has been followed by some later adherents of the Vedānta such as Bhāskara. Bhāskara holds the view that brahman, while being in a single form as the cause of the world (*abheda*), also exists in a multiplicity of forms as the effects (*bheda*). This paper discusses Bhāskara's ontological concept of *bhedābheda* and his criticism of Śāṅkara's notion of *avidyā*, mainly dealing with Bhāskara's commentary on the *Brahmasūtra*.

As is often the case with the consequences of the monism, the followers of the Vedānta face the question of how a single entity possesses diversity. Śāṅkara introduced the concept of *avidyā*, by which he posited a relationship of real vs. unreal between the absolute being and all other existences in this empirical world. Bhāskara criticizes Śāṅkara's illusionistic monism from the view point of realistic cosmology which is, according to Bhāskara, more truthful to the intention of the author of the *Brahmasūtra*. More specifically, Bhāskara refutes Śāṅkara's notion of illusory world by means of denying the existence of its cause, *i.e.* *avidyā*. According to Bhāskara, the diversity of the single entity can be explained by the notion of part-whole relationship which is taught in the MuU through the metaphor of the relationship of a fire and sparks. The point of their discussion can be summarized as follows: Śāṅkara introduced the notion of falsity and observed the principle of monism, while Bhāskara emphasized the realistic point of view and was rather intent on rationalizing the diversity of brahman. The radical monism of Śāṅkara might have resulted in the conservative attitude of Bhāskara who tried to be truthful to the traditional cosmology taught in the *Upaniṣads*.

This study is based on a new critical edition prepared by the present author, since the first edition of Bhāskara's *Brahmasūtrabhāṣya* has been held in disrepute as being poorly edited since its publication in 1915. For this new edition, I have consulted a posthumous edition by the hand of the late Prof. J.A.B. van Buitenen and some recently identified manuscripts.